本音交差 若者の「解放区」

フォークゲリラは新聞やテレで報道され、世間の注目を集る。活動の舞台となった新宿西口地下広場には表現の場をめて、さまざまなグループが入りするようになった。歌声が響く横でヘルメットをぶり、ゲバ棒を担いでジグザデモを繰り返す学生たち。その傍らで、詩集を売ったり、ごみ拾いに励んだりする人もいた。さながら広場は若者たちの「解放区」だったという。

大木晴子さんは、若者が暴力に巻き込まれないよう大人たちが先導してくれたのを覚えている。「歌の後は、思い出横丁でゲイカツ（鯨肉のかつ）を食べながら討論の続きが始まるの。この時の経験があるから、『自分一人じゃない』と、プラカードを持って今も広場に立てるんです」

当時、早大に通いながらべ平連の職員を務めていた日本ペンクラブ会長の吉岡忍さん(71)も「ゲリラ」の一人。「べ平連は言い出しっぺが実行するというルール。地下で演奏したのは、地上だと声が抜けて響かないから。サラリーマンともよく討論しましたが、会社では言えない戦争体験や本音も吐露していました。まさに広場は人間のバザールでした」と振り返る。

1969年6月28日の集会では、興奮した群衆が西口交番に投石した。これを口実に警視庁は取り締まりを強める。道路交通法や都公安条例違反で首謀者を摘発し、「ゲリラ」のメンバーの中からも逮捕者が出た。

7月12日にも7千人が集ったが、警察は新たな方針を打ち出す。広場を通路とみなし、集会を禁じた。以後、演奏活動はできなくなり、5カ月余り続いた若者たちの歌声も広場から消えてしまった。

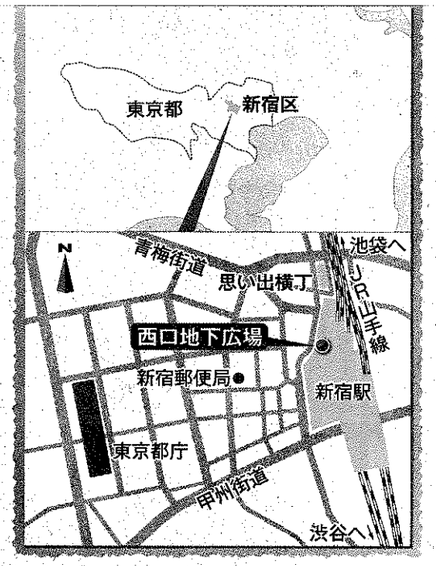
砂川市議を務める小黒弘さん(72)もフォークゲリラの中心メンバーだった。東京の中学の頃からベンチャーズが好きでギターを始めた。弁護士を目指して中央大法学部へ。一時、学生運動に身を置いたが、なじめずべ平連に移った。

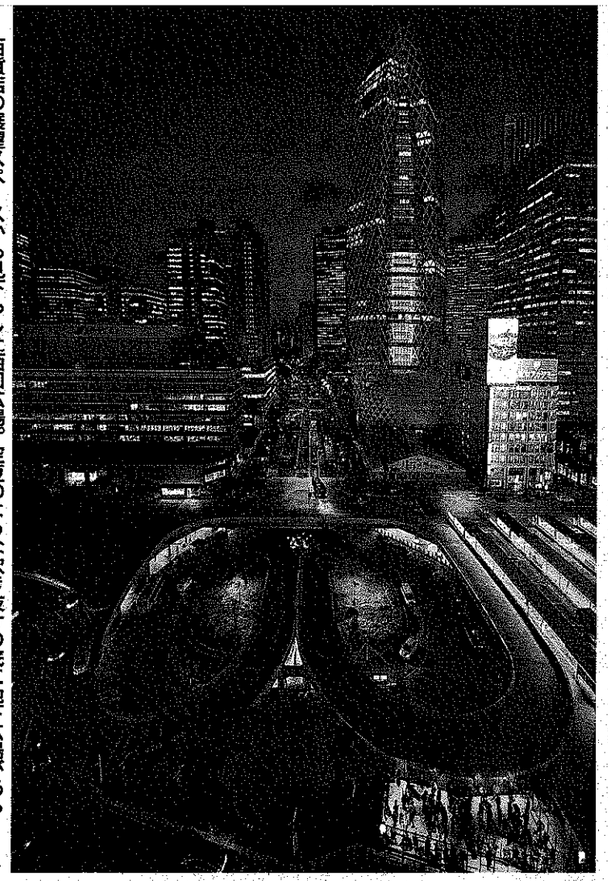
仲間からは「歌う姿がゴリラに似ている」とゴリと呼ばれた。ギターの腕を見込まれ、地下広場で歌声を引っ張った。「歌は運動のための道具かという批判があった。私は言葉よりも歌は心に入り込む力がある、歌は社会を変える力になると思っていました」

「ゲリラ」終息後、大学に戻らず、革細工の技術を身につけ、地下広場の上の新宿駅前の路上で革の財布を売った。そこには行商やヤクザ、靴磨き職人もいた。「学生インテリのプライドなんて通用しなかった。肩肘張らないけれど権力におもねらない人が多かった」

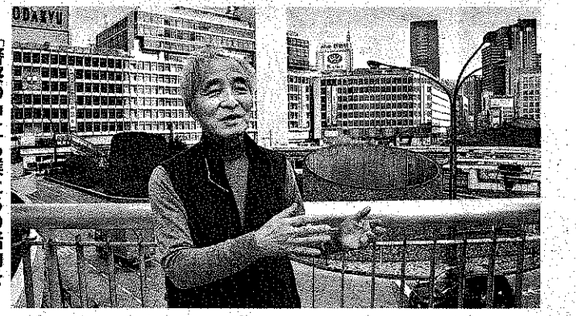
その後、全国を放浪し、妻の故郷であり「程よい田舎」の砂川へ移住。革細工販売や喫茶店経営を経て、95年に市議になった。大木さんがウグイス嬢として選挙を手伝ってくれたこともある。

今、新型コロナ対策に心を砕く小黒さん。「こんなご時世だからしゃべらない方がいいという考え方もある。でも、しっかり一人一人が顔を向き合わせ、声を出しあえば何かが生まれるはず。そう思うようになった出発点は、あの時代なのかもしれません」




百貨店の展望スペースから見下ろした西口広場。空豆のような吹き抜けの底に地下広場がある

「わかりやすい言葉で伝えることの大切さを新宿西口から学びました」と、思い出を語る小黒弘さん


「警察の中にも僕たちの活動を理解してくれる人がいました」と話す吉岡忍さん

「ゲリラ」の人たちがよく通った「思い出横丁」。居酒屋や食堂が並ぶ

投石され、活動終息のきっかけとなった新宿駅西口交番

1969年の出来事

■日本の国民総生産（GNP）が世界2位になったと経済企画庁（現内閣府）が発表■アポロ11号が人類初の月面着陸■映画「男はつらいよ」第1作を公開

こぼれ話

乗降客と車 流れスムーズに

★新宿駅西口地下広場

新宿駅西口地下広場は1966年、東京都が建設した。

大正時代、東京の下町は関東大震災で壊滅的被害を受け、住民の多くが東京西部の郊外へ移住。西部の要衝となった新宿駅には複数の私鉄が乗り入れ、百貨店も進出し、一大繁華街になった。

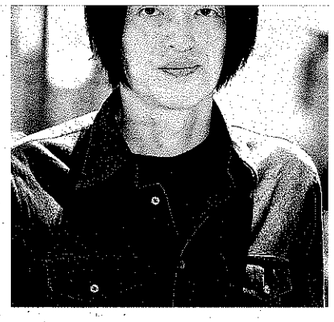
第2次世界大戦後、増える乗降客や自動車をさばくため、新宿副都心計画の要として西口広場構想が浮上。世界的建築家ル・コルビュジエの弟子、坂倉準三が「太陽と泉のある立体広場」をうたい文句にデザインした。

地下2階建てで、上空から見ると空豆状の吹き抜け穴が二つ並んだように開いている。自動車は周回道路をたどって地下へ。地下1階のロータリーにはタクシー乗り場を配置。地下2階には駐車場を設けた。吹き抜け穴は換気口だけでなく、地下に光を採り入れる効割も果たしている。

ロータリー周辺に広場があり、他人とぶつからずにJRや小田急線、京王線、地下鉄などへの乗り換えがスムーズにできる。イベントコーナー＝写真＝も設けられ展示会などに使われている。

高度成長下の社会を象徴

★慶応大教授　小熊英二さん(57)＝歴史社会学



フたちが参加してわば大衆運動のプ（場所）です。べ対なら、他の思想確な組織もない。既存の政党や労働組合にあきたらない人々が集まりました。

当時は高度成長に伴う社会変化に政治や制度が追いつけず、大学の管理体制、都市環境、公害などの面で、あらゆる旧制度が問い直されていた。ベトナム戦争は単なる地域紛争ではなく、世界と日本のひずみの象徴だったのです。

ただしフォークゲリラの活動だけで、あの集会が形成されたわけではない。新宿の地下広場では、それ以前から自然発生的に人が集まって議論していた。当時は就職や進学などで地方から東京に出た若者が多く、孤独感を抱え人と話したがっていたからです。

そこにフォークゲリラが演奏を始めて人が集まったのですが、彼らの意図と関係なく、合唱の一体感を楽しみたい人も多かった。歌を聞かずに、自分たちの議論に熱中している人もいたそうです。それ自体、高度成長下の社会を象徴する現象だったといえます。